慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ケネー経済表範式の疑義に就て : 坂田太郎教授の『ケネー経済表』の「訳者解説」を中心として
Sub Title	An essay in the explanation of the mechanism inherent in the "Formule du tableau économique" of François Quesnay : concerning mainly the annotations of Prof. Taro Sakata as translator
Author	渡邊, 建
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.3 (1958. 3) ,p.260(66)- 275(81)
JaLC DOI	10.14991/001.19580301-0066
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580301-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ケネー経済表範式の疑義に就て

——坂田太郎教授の『ケネー経済表』の「訳者解説」を中心として——

渡邊　建

一

ケネーの経済表は tableau fondamental と称せられる原表から、その雁木型の支出細分の過程を括約せる『農業哲学』の略表 tableau abrégée を経て『農業哲学綱要』の略式 formule abrégée に又『経済表の分析』の範式 formule du Tableau Économique に到達せるものと考えられる。

第一　経済表（原表）と略表と略式及び範式に就て

坂田教授はその『ケネー経済表』の「訳者解説」に経済表（原表）と『経済表の分析』以後に於ける経済表の範式との構成上の相違を明らかにするために必要な道程として『農業哲学』の略表を採り上げられ『農業哲学』に原表と略表が、又その『綱要』に原表と略式とが掲載されていることが、その中間的性格を裏書きしているかに思われるとせられる（「訳者解説」五三頁）。

従来一般に経済表は原表と範式（一般には略表と呼ばれているが）との二種あるものとし、而も両者はその記入する数字から又、点線にて示めされる機構から別個のものと考えられ「この両者を矛盾なく、その形式に於ても、内容に於ても、果又数字に於ても統一することは不可能である」（山口正太郎博士論稿『経済表の研究』—大阪商科大学経済研究年報第四号一一一頁）とさえ考えられていたのであるが筆者は先年『農業哲学』の略表を採り上げて、それを原表から範式への進展過程の一中間形態とし、この三者の機構の進化の過程と、それぞれに使用される数字の論拠とを明らかにしたのであるが、その場合『農業哲学綱要』の略式は範式と一括して取り扱ったのである（三田学会雑誌第三十八巻第二号、第三・四合併号、第八号）。

しかるに坂田教授は「ジジッ略式と範式とはほぼ同じ構成を示す」（「訳者解説」五三頁）とし「それゆえただ表の形式から言うならば略式と範式とを区別する理由はほとんどないのであるが『綱要』の説明と『分析』のそれとの間には、やはり注目すべきひらきを認めざるを得ない」（「訳者解説」七〇頁）とせられて、略式を略表と一括して原表と範式との中間形態 Forme intermédiaire とせられたのである。教授は斯く『農業哲学綱要』の解説を重視せられ、その略式の構想も範式のそれよりも前の段階に属するものとせられる。その『綱要』の刊行が一七六七年の三月であり、範式を掲げる『経済表の分析』を編纂する論集『フィジオクラシイ』が同年の十一月に公刊されたことから略式が範式より先に発表せられたものであることは論がないとしても『経済表の分析』がデュポンの要請によりて執筆せられ、その時、経済表としての新しい機構の範式が創作せらるることとなったのであり、その論稿が「農業、商業及び財政雑誌」Jornal de l'agriculture, du commerce et des finances の一七六六年の六月号に発表せられた『経済表の分析』に掲載されなくとも、その時には当然考えられてあったものと推定され、又同誌八月号に掲載されたケネーが経済表の適用の一例として「凡百の経済問題の解決のために辿らなくてはならぬ過程の一例として提起する」『経済問題』には「分配表」Tableau de la distribution として範式の形式が表明されたものと思われる。

他面、『農業哲学綱要』の内容は、その表題の示めすごとく『農業哲学』の複雑なる実例や煩瑣の計算とを削除したその要約であるが、只それに、ケネーが新たの構想になる範式を略表に替えて掲載したのが略式であると考える時、『綱要』の説明が略式の解説としては適合せざる個所が見られるとしても無理からぬこととも思われる。

従って坂田教授も『綱要』の説明と『分析』のそれとを比較して、両者の間には差異ありとせらるるが、図表としては略式と範式とを一つに考えられて「原表と範式との構成上の相違は略表と略式との形式上の相違に集中的にあらわれている」（「訳者解説」五六頁）とし、又「原表と範式との構成上の相違は、かなりに略表と略式との間の相違にこれを集約できる」（「訳者解説」七〇頁）ものとせられることとなったのである。

第　一　図

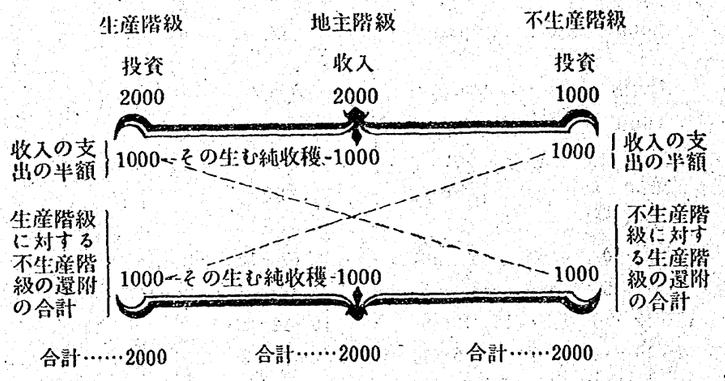
『農業哲学』の経済表（原表）

生産階級	地主階級	不生産階級
年投資	所得	年投資
2000	2000	1000
農産物	純収穫	製作品
1000	1000	1000
500	500	500
250	250	250
125	125	125
62－10	62－10	62－10
31－5	31－5	31－5
15－12－6	15－12－6	15－12－6
7－16－3	7－16－3	7－16－3
3－18－2	3－18－2	3－18－2
1－19－1	1－19－1	1－19－1
0－19－6	0－19－6	0－19－6
0－9－9	0－9－9	0－9－9
0－5－0	0－5－0	0－5－0
0－2－6	0－2－6	0－2－6
0－1－3	0－1－3	0－1－3
0－0－8	0－0－8	0－0－8
合計 2000	合計 2000	合計 2000

第　二　図

『農業哲学』の経済表の略表

表に示された分配の結果の概要



総再生産額は生産階級に集り，この階級に支出される総額に等しい。その内訳を示せば

生産階級の投資……2000
直接生産階級の手に移る収入の部分……1000
生産階級に対する不生産階級の還附の合計……1000
生産階級からの原料品の購入に使われる不生産階級の投資…1000
合　計…5000

斯くて総再生産額は5000，その中耕作者がその投資として
及びその原投資と年投資との利子として回収する分……3000
収入として残る分……2000
合　計…5000

表の中に含まれる富の総額
総再生産額……5000
収入の貨幣……2000
不生産階級の業者がつねに保有するこの階級の投資……1000
合　計…8000

而して、坂田教授は『農業哲学』には二十七の略表が収録せられるとするが（「訳者解説」五三頁）、その内の四表は原表の生産・不生産両階級の相互的支出の第二次以下の支出過程を単に省略したものであって、これ等は両階級間相互の雁木型の支出過程を括約した略表とは構成上異なるものであるから筆者は前者を「省略せられたる原表」とし、略表としては二十三表のみと解したのである（三田学会雑誌第三十八巻第二号八五頁、八七―八九頁参照）。

尚、坂田教授は略表は「原表をそのまま概括しようとしたものであることには問題がない」が「原表と異なる性格を打ち出している点」を注意しなくてはならず又「結果から見ると大きな推移の可能性をはらんでいる点」は考慮を要するものとせられたのである（「訳者解説」五四頁参照）。

第二　原表と略表との差異に就て

㈠　坂田教授は略表はすでに三つの階級を代表する個々の地主と農業者と商工業者との間の流通――個別資本の再生産過程――をそれぞれの階級間の流通――社会的総資本の再生産過程――を総括的に示す性格のものに変りかけていることに注意すべきである（「訳者解説」五四頁参照）とせられる。洵に原表の生産・不生産両階級間の等比級数的細分の相互支出過程を総括することによりて略表が一国全体の数字をそのまま使用し得る形式となったことは一進歩であるが、原表に在りても、その目的は一国全体の流通がその対象であることは論ずるまでもなく、初版の草稿にも、第二版の『経済表の説明』にも地主の一戸平均の純所得四百リーヴルはその階級の純所得総額四億リーヴルに、又その純所得六百リーヴルは全国的の六億リーヴルに直ちに置き替えられているのであるが、略表の形式に於て、初めて表の上に全国的総額がそのまま使用し得らるることとなったのである。

㈡　坂田教授は原表に於けるがごとき生産・不生産両階級の「階級内の流通は表示から洩れているというのではなくて、完全に図式から抹殺されてしまっている。したがってわれわれはこの略表の解釈に、原表のそれを不用意にもちこむことを躊躇せざるを得ないくらいである」（「訳者解説」五四頁）とせられる。しかし略表が原表のジグザグの相互の支出過程を括約せるものと解すれば、同一階級内への支出が表の上に表われてはいないが、只その結果のみが表示されることとなったのであって根本的に抹殺されているわけではないのである。

㈢　坂田教授は略表の附記からして

(i)農産物再生産額が原表の投資の利子を別に考慮しての四単位、四千リーヴルから、それを計算に入れた五単位、五千リーヴルになったこと。

(ii)生産階級の年投資が『哲学』以後になると貨幣に転形せず、現物のまま生産階級内にて消費せらるる農産物と解せられることとなったこと（「訳者解説」五八―五九頁）。

(iii)流通する貨幣額は二単位二千リーヴルとせらるるも尚、農産物再生産額の五単位と別に「表の中に含まれる富の総額」に計上される不生産階級の投資一千リーヴルは「実は貨幣形態のそれとでも考えるより他に仕方がない」（「訳者解説」六三頁）こととなったこと。等

が考えられたのであるが、農産物再生産額は原表の附記にありても、生産階級の投資の利子を計上して五単位とされており、又生産階級の年投資も、原表にて、地主・不生産両階級へ食料として売却せる農産物の代金が、当該年度の年投資となるものと筆者のごとく解すれば、略表に在りても同様に考え得られ、それによって、中央の純収穫の再生産が行われると解されるのである。同様に、不生産階級の投資も、貨幣即ち製作品の生産階級への売却代金であると解すべく、又斯く不生産階級の投資を貨幣としても、尚流通する貨幣総額は二単位、二千リーヴルと解すべきであって『哲学』に於ても、その『綱要』に在りても、不生産階級の投資は「二千リーヴルの金銭的富によって、この階級に還附されるもの」（Philosophie rurale., p. 44, p. 116: t. I, p. 128, p. 327: Eléments., p. 51.:「訳者解説」六三頁）と説明されているのである。

不生産階級の投資を、製作品としても、それは農産物の転形であ

り、又貨幣としても、それは循環する貨幣の一時的の姿であるから、いずれとしても、「表の中に含まれる富の総額」の中の不生産階級の投資は重複計算となるのである。

この「表の中に含まれる富の総額」を経済表の各年度の前提と解すれば、マルクスや筆者の解釈では、地主階級に所得としての貨幣二単位、二千リーヴル、生産階級に年々再生産される農産物五単位、五千リーヴル、不生産階級に年々他の階級に売却する製作品二単位、二千リーヴル、合計九千リーヴルの富となるが（本稿第七図参照）、ビリモヴィッチやウーグ博士、及び坂田教授の解釈のごとく製作品一単位が一期間内に二度反覆製作されるとすれば期初に前提となる製作品は一単位、一千リーヴルであるからこの場合「富の総額」は八千リーヴルとなり、略表の附記と一致することとなる。従ってこれ等の諸点はいずれも、原表と略表との差異とはならぬこととなる。

㈣　原表と略表との表式に於ける差異は原表の第一段階の「生産階級の年投資額とその生む純収益としての地主階級の所得」としての点線が略表から除かれたことであるが、これは地主・生産両階級間の他の過程とは性質を異にするものであって、従来一般には、生産階級から地主階級へ小作料・租税・十分ノ一税等として、その所得が納付せられる過程と解されたのであるが坂田教授は原表の解説に当り、この原表の第一段階を原表に表示されているジグザグの支出過程以外の三階級間の支出過程として、それによりて、生産・不生産両階級それぞれにジグザグの支出過程にて滞留する貨幣の一単位ずつが農業者の手中に帰し、それが地主階級へ納付し得らるることとなり、又原表には示めされていないが、説明に述べられている生産・不生産両階級内の支出に関連あるものとして独自の解説を試みられたのである（「訳者解説」四六―四七頁、拙稿「ケネー経済表（原表）の疑義に就て」三田学会雑誌第五十巻第六号参照）。

従って、この原表の第一の段階を欠く略表には、坂田教授の原表の斯くのごとき解釈はそのまま「もちこむことを躊躇せざるを得ない」（「訳者解説」五四頁）こととともなったのである。しかしながら筆者はこの原表の第一の段階はジグザグに表示せらるる過程に於て、生産階級の純収穫の売却代金が年投資となり、又その生む純収穫の売却によりて収得する純収益が地主階級の所得として納付せらるる本年度と同一の過程が前年度にも行われて生産階級の年投資が地主階級へその所得の納付を可能にすることを示めすものと解すが故に、只略表にては地主階級が所得として二単位の貨幣、この場合にては二千リーヴルを生産階級から納付せられて既に所持することを前提とすることによりて、原表と全く同一の解釈を行い得るものとする。斯くして筆者は越村教授と同じく略表は「原表を機械的に要約」（『ケネー経済表研究』一二六頁）したものであって両者の間には何等根本的差異を認めないものである（本稿第一・二図参照）。

二

第三　略表より範式（略式）への進展に就て

㈠　斯くして、略表に在りても、その表示せらるる過程に於ては原表と同じく不生産階級に生産階級から支払われたる貨幣一単位、一千リーヴルは不生産階級にその投資の回収として滞留することとなるが、それが、当該年度の投資として製作品の原料とする農産物を購入するために生産階級に支出される過程を追加することによりて貨幣の総額二単位、二千リーヴルは全額生産階級に還流して、斯くて地主階級へその所得となる二単位の貨幣を納付し得ることとなり、又不生産階級は二単位の農産物を取得して再び地主・生産両階級に売却すべき二単位の工業製品を製造し得ることとなるのである。

斯くて不生産階級は製作品の売却代金の全額を生産階級へ支出することとなるが、その過程を原表の形式にて表式して筆者は「補足せられたる原表」（三田学会雑誌第三十八第巻三・四合併号一一二頁第二図、同誌第三十八巻第八号三三頁第四図、本稿第三図参照）とし、又略表に不生産階級の生産階級への第二回目の支出を追加して筆者は「補足せられたる略表」（三田学会雑誌第三十八巻第八号三四頁第五図、本稿第四図参照）を得たのであるが、それは「補足せられたる原表」の総括であり、又バウエルの修正表（Economic Journal, Vol. V, p. 17）と同一の図式となるものである。ウーグ博士も経済表（原表）の理解に到達する思考素材として『経済表の分析』を検討しその「完成せられたる原表」を掲載している（Tableau Economique of Francois Quesnay., 1950, p. 75. 拙稿「安定均衡の経済表に就て」三田学会雑誌第五十巻第二号五四頁第六図参照）。

この三階級間のすべての支出過程を、従って又貨幣の完全なる循環を表示する「補足せられたる原表」も、又そのジグザグの支出過程を括約する「補足せられたる略表」も、経済表の原表や略表と等しく、生産・不生産両階級の貨幣としての投資の支出を明確に表明していないのである。この生産・不生産両階級の投資の支出を、地主階級の所得と表の同列の位置から均斉に、明確に表式したのが『農業哲学綱要』の略

第　三　図

「補足せられたる原表」

生産階級 年投資	地主階級 所得	不生産階級 年投資
2000	2000	1000
農産物	純収穫	製作品
1000	1000	1000
1000	500	500
500	250	250
250	125	125
125	62－10	62－10
62－10	31－5	31－5
31－5	15－12－6	15－12－6
15－12－6	7－16－3	7－16－3
7－16－3	3－18－2	3－18－2
3－18－2	1－19－1	1－19－1
1－19－1	0－19－6	0－19－6
0－19－6	0－9－9	0－9－9
0－9－9	0－5－0	0－5－0
0－5－0	0－2－6	0－2－6
0－2－6	0－1－3	0－1－3
0－5－0	0－2－6	0－2－6
0－2－6	0－1－3	0－1－3
0－1－3	0－0－8	0－0－8
合計 3000	合計 2000	合計 2000

式であり、『経済表の分析』の範式に他ならぬのである。筆者は後に掲載する第七図「範式解説図」にその過程を表示することとする（三田学会雑誌第三十八巻第八号五三頁第七図参照）。

㈡ 坂田教授が『ケネー経済表』の附録一――Les variationsdu Tableau economique――に、中間表 Forme intermédiaire の一つとして写真版の第二として初めて発表せられたケネー手記の「表に示された分配の結果の概要」は巴里の国立文書保管所の「ミラボー文書」のM七八四書束中の一葉（71-3）であるが、同じ表題の下に『農業哲学』に掲載される略表（本稿第二図）の単なる草稿ではなく又坂田教授が述べられているように、単に「『哲学』の「概要」のさらに圧縮したもの」（「訳者解説」六四頁）でもないように考えられる。

第四図

「補足せられたる略表」

生産階級 年投資	地主階級 所得	不生産階級 投資
2000	2000	1000
1000	純収穫 1000	1000
1000	純収穫 1000	1000
1000		
2000	合計 2000	合計 2000
合計 5000		

この「ケネー手記の概要」は『哲学』の経済表に、初めて記入された各階級の総額二千リーヴルを最初に掲げて「地主階級の所得二千リーヴルの支出は生産・不生産両階級間の相互の還附によってその全額が両階級のおのおのの手に移る」と原表のジグザグの支出過程を文字にて説明している。

この生産階級が受け取る二千リーヴルは年投資として使用され、その再生産する純収穫二千リーヴルは中央に記載される。又この階級が消費する農産物二千リーヴルの回収分と不生産階級から購入される製作品にて補塡される原投資の年々の損耗分の回収分即ちその利子としての費用の回収分二千リーヴルとを加えた合計三千リーヴルの年支出の回収分としての農産物三千リーヴルが表の中央に記載される。

経済表（原表）やその略表の中央に表示された再生産される純収穫の二千リーヴルとこの年支出の回収分としての三千リーヴルとの合計が農産物再生産額五千リーヴルとして記載されている。後の範式では、この中央の記載部分が削除せられたのである。

不生産階級には地主階級の所得の半額一千リーヴルと、生産・不生産両階級間の相互支出の過程の結果、不生産階級に齎らさるる一千リーヴルとの合計二千リーヴルがこの階級の受取総額となるが、その中の一千リーヴルは、この階級の報酬として、食料購入のために生産階級へ支出され、残額一千リーヴルが投資の回収として留保されるが、これも製作品の原料購入のため生産階級に支出さるることとなるものであると説明される。この支出を範式では不生産階級の投資の支出として表式される。この不生産階級の投資一千リーヴルの支出と生産階級の年投資二千リーヴルの支出と、その消費する農産物二千リーヴルと原投資の補修のために使用される製作品一千リーヴルとの合計五千リーヴルの支出を加算して支出総額六千リーヴルと記載し、それは農産物の年々の再生産額五千リーヴルによりて、同額の支出額六千リーヴルと同額の再生産額五千リーヴルが年々更新されるものであると説明する。

この場合生産階級の支出合計五千リーヴルの内には貨幣としての年投資の支出二千リーヴルと、財貨としての年投資の支出二千リーヴルとが重複して計算されている。又年々五千リーヴルの支出によりて再生産額が五千リーヴルでは純収穫がないこととなる。三千リーヴルの年々の支出によりて再生産額が五千リーヴルであるから年々の純収穫が二千リーヴルとなるのである。従って、略式や範式にありては、この生産階級の支出額五千又は五十億リーヴルはこの階級の受取額と考えられている（Œuvres., p. 315：邦訳岩波文庫本五四頁、坂田訳本一四二頁参照）。

このケネー手記の「表に示された分配の結果の概要」を邦訳した坂田教授の

第五図

ケネー手記の「概要」

生産階級	地主階級	不生産階級
投資	所得	投資
2000	2000	1000

この支出は相互の還附によりてその全額が両階級のおのおのの手に移る

2000この額が生む 純収穫 2000

2000

この額の中でこの階級の報酬として生産階級に支出されたのは 1000

投資の支出

2000の回収として再生産される 2000

投資の利子としての支出 1000の回収として再生産される 1000 ｝3000

再生産額合計 5000

従つてこの階級の投資の補塡として留保され、次いで原料購入のために生産階級へ支出される額は 1000

支出額

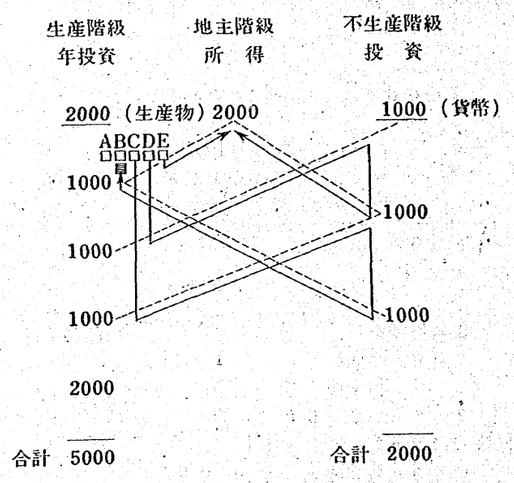
5000

支出額合計 6000

不生産階級の投資の支出を加算すれば支出額合計は6000となるがこの投資1000の支出によりて購入される農産物は製作品に転形して生産階級の支出の対象となるものであるから農産物再生産額5000によりて年々6000の支出と再生産額5000が更新される。

第　六　図

「坂田教授の範式解説図」



『ケネー経済表』第三図（同書「訳者解説」六五頁）は原文の形に忠実のため理解し難い点があるので、前記の筆者の解釈によりて多少の変更を行った図表を掲げることとする（本稿第五図）。

『農業哲学』には同じ表題の下に、略表とその附記とが発表されたのであるが（坂田教授『ケネー経済表』Figure Ⅰ・邦訳同書五〇頁、本稿第二図参照）、筆者はこのケネー手記の「概要」の中にむしろ『農業哲学綱要』の略式や『経済表の分析』の範式の胎動を感ずるものである。その意味に於て坂田教授のこの「ケネー手記の概要」の発表は内外学界に対してきわめて意義ある努力であったと信ずるものである。

三

第四　坂田教授の経済表の範式の解釈に就て

㈠　坂田教授は経済表の範式を解説せらるるに当り数字は略式の一単位一千リーヴルを使用し（「訳者解説」七三頁第四図、本稿第六図）、三階級の支出開始前の状態を次のごとく前提する。

(i)地主階級は所得として貨幣二単位、M_1、M_2――略式にては二千、範式にては二十億リーヴル――を所持する。

(ii)不生産階級は投資として貨幣一単位M_3――略式にては一千、範式にては十億リーヴル――を保持する。

斯くして循環する貨幣額は三単位、M_1、M_2、M_3――略式にては三千、範式にては三十億リーヴル――となる。但し貨幣のM_1、M_2、M_3の記号は筆者が説明の便宜のため、又バウエルの流通する貨幣額を二単位とするその修正表式との比較のために書き加えたものである。

(iii)生産階級は農産物五単位、A、B、C、D、E又はA′、B′、C′、D′、E′――略式にては五千、範式にては五十億リーヴル――を所持する。

㈡　坂田教授は支出の第一過程として不生産階級は投資一単位としての貨幣M_3を支出して原料とする農産物一単位Dを購入し、それによりて製作品一単位F――略式にては一千、範式にては十億リーヴル――を作る。これは坂田教授も「流通の順序としてはやや不自然な形となろう」が「不生産階級は期間のはじめにおいて、貨幣形態をとる投資以外になにものをも所有しないらしいから」（「訳者解説」七二頁）止むをえないものと考えられる。尚筆者は説明の便宜のために他の階級に売却する製作品二単位をF、Gとする。

㈢　支出の第二過程として、地主階級はその所得とする貨幣二単位、M_1、M_2を生産・不生産両階級へ等分に支出して農産物一単位Eと製作品一単位F（農産物Dの変形）とを購入し消費する。

㈣　支出の第三過程として、不生産階級は製作品一単位Fの代価として地主階級より受け取る貨幣一単位M_2をもって食料とする農産物一単位Cを購入し、それにて等価の製作品一単位Gを作る。

㈤　支出の第四過程として、生産階級は農産物一単位Eの代価として地主階級より受け取る貨幣一単位M_1をもって原投資の年々の損耗を補塡するために使用する製作品一単位Gを購入する。斯くして、生産階級は不生産階級より農産物二単位C、Dの代価として受け取る貨幣二単位M_2、M_3は次に地主階級に納付するものとする。

㈥　不生産階級は製作品一単位Gの代価として生産階級より受け取る貨幣一単位M_1を次年度の投資として使用すべく保持する。

㈦　生産階級は、財貨としての年投資として消費する農産物二単位A、Bと製作品一単位Gとによりて農産物五単位A′、B′、C′、D′、E′を再生産する。生産階級内にて消費せられる農産物二単位A、Bと、原投資の補修に使用さるる製作品一単位G（農産物Cの変形）とは年支出であるから、A′、B′、C′は年支出の回収分であり、地主・不生産両階級に売却せられるD、EまたはD′、E′が純収穫と解せられる。但し坂田教授の原表の解説においてはAとCとが年投資としての支出の回収分、DとB（製作品Eに変形）とが純収穫と解釈せられたのである（「訳者解説」四八頁第一図、拙稿「経済表」（原表）の疑義に就て――三田学会雑誌第五十巻第六号第三図、第四図参照）。

㈧　斯くの如き坂田教授の経済表の範式の解釈では「第四図（本稿第六図）のごとく範式の形そのままではない。事実『経済表の分析』におけるケネーの説明を基として流通の秩序を描くとすれば範式の形そのままとはならないのが当然なのである」（「訳者解説」七四頁）とせられるが、それは三邊金蔵博士が描き直された説明図（『経済学説研究』三四七頁）と等しい構成となり、従って坂田教授は「ケネーの説明を忠実に追い行きて作れるものなれば彼（ケネー）の説明に誤りなき限り、此の表は改めらる可き性質のものにあらずと謂い得る」（『経済学説研究』三四八頁）とする三邊博士の見解に同調していられるのである（「訳者解説」七六頁）。

然しながら他面、坂田教授は流通する貨幣量が原表や略表にては地主階級の所得額と等量の二単位とされてきたのが、範式に至って三単位と大きな変化があったことを注意せられ（「訳者解説」七五―七六頁）、循環する貨幣量を二単位、二十億とすることに就ては『経済表の分析』の「要約」を表式するバウエルの解説図（Economic

Journal, Vol. V, pp. 16-18）に賛意を表していられる（「訳者解説」七七頁参照）。この場合、坂田教授は不生産階級の投資をバウエルは財貨とし、貨幣でないとしていると解せられるが、バウエルの修正表式では不生産階級の投資からは直線が引かれていないが、その説明によれば、生産階級から不生産階級に3^1の過程で支払われた貨幣が不生産階級の投資の回収であり、それが、原料とする農産物購入のために3^2の過程により生産階級に支出されるものであるから、それが投資としての貨幣と考え得られるのである。

経済表の原表に於けると同様に範式（略式）に於ても生産階級の年投資を飽くまで財貨形態にて把え「現物のままで消費されるものでなければならぬ」（「訳者解説」七四頁）と考えられる坂田教授は範式に於て生産階級の年投資から不生産階級への支出の斜線が引かれていることは「筋の通らないところである」（「訳者解説」六八頁）とせられ又『経済表の分析』の「要約」に「前年度に支出された生産階級の投資額」（Œuvres., p. 315：岩波文庫本五四頁、坂田訳本一四二頁）とする故にその年投資から「支出を意味する斜線は無意味である」（「訳者解説」七四頁）とし、それは「どう考えても『経済表の分析』の説明と合致しない」（「訳者解説」七五頁）ことを再び注意せられるのである。

既に、三邊金蔵博士も生産階級の年投資から「範式の如く点線を引くはケネーの説明の何処に照合して之を勘考するも、終に其の理由を得る能わずして結局無意義たるを発見すれば」むしろ「改むる可きは範式なり」（『経済学説研究』二四六―三四八頁）と考えられたのである。

従って「訳者解説」の七三頁に掲載される第四図（本稿第六図）は「経済表の範式」とせられるも、それは「範式の形そのままではない」（「訳者解説」七四頁）のであって三邊博士や久保田博士が『経済表の分析』の本文の説明によりて描く範式の解説図と同じ機構となるものである。

(九) 斯くて坂田教授は経済表の「原表こそは生理学者ケネーの構図として適わしい構成をもつのであり、それこそが tableau fondamental なのであり、範式は略表とともにその説明図に過ぎない、或いは範式はたかだか説明図としての略表を改良したものに他ならないということにもなるのである。」（「訳者解説」八五頁）とオンケンやウーグ博士と同様の意見を持たれたのである。

四

第五　坂田教授の範式の解釈の検討に就て

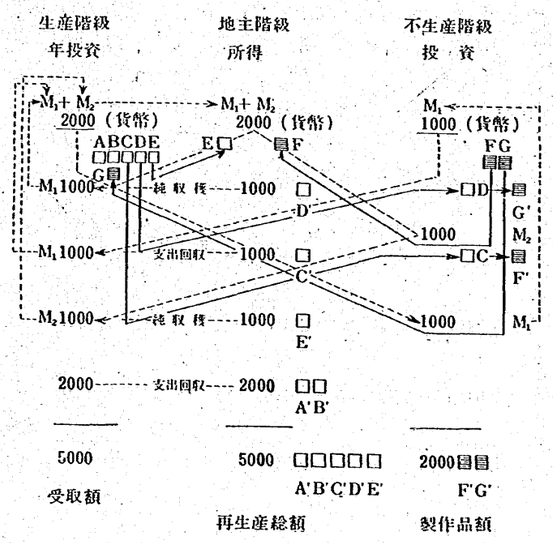
(一) 範式に於ては略表と同様に地主階級の所得は既に生産階級より納付せられて貨幣にて所有していることと解する。従ってこの点に就て原表の坂田教授の解釈は、そのまま範式には適用し得ないのである。

(二) 生産階級の年投資に就ては、坂田教授は原表の解釈から財貨とせられるがケネーの経済表第二版の『説明』から貨幣の流通によりその投資は「絶えず財貨的形態から貨幣形態に、また貨幣形態から財貨形態に転形する構想である。」（「訳者解説」三二頁、四〇―四一頁参照）ことを注意せらるるも、略表の解釈からは「生産階級の年投資は貨幣に転形せず、現物のまま充用されることになるが、このことも『哲学』以後における構想の推移をあらわすもの」（「訳者解説」五八頁）として注意せられ、範式にては生産階級内にて現物のまま消費される二千リーヴルを年投資と解せられる（「訳者解説」五九頁参照）のである。

しかし、原表にては地主・不生産両階級へ食料として売却せる農産物の代金が貨幣形態の年投資であり、不生産階級との相互支出の結果その半額は製作品購入のために不生産階級に支出され、他の半額は同じ生産階級内の労務者に賃銀として支払われるのである（Tableau Œconomique., p. ii, p. iv：邦訳岩波文庫本二〇頁、二二頁、坂田訳本二六頁、二九頁参照）。又、略表にありても、地主・不生産両階級への農産物の売却代金が生産階級の年投資となるもので、その半額は製作品の購入代金として「不生産階級へ還附」せらるるのであるが（Philosophie rurale., p. 44, p. 116, t. I, p. 123, p. 327：坂田訳本五〇頁）、略表のあるものには明らかにそれは「不生産階級に支出された生産階級の投資の半額」（Philosophie rurale., p. 146, p. 147, t. I, p. 405, p. 407：坂田訳本一〇九、一一一頁）と註記せられるのである。従って筆者は範式（略式）に於ても、地主・不生産両階級への農産物の売却代金が生産階級の年投資となるものと解釈し、その意味を明らかに表示するために上部の年投資の位置に移動して、年投資より不生産階級への支出の点線が描かれるものと解したのである（三田学会雑誌第三十八巻第八号五三頁第七図、本稿第七図参照）。

原表にても、略表にても、範式（略式）にても、純収穫が商品資本となり、その売却代金が貨幣資本となり、これが経済表に掲げられる生産階級の年投資と称せられるもので、その半額が労務者の賃

第七図
範式解説図



銀として生産階級内へ、その半額が製作品購入代金として不生産階級へ支出せられ、労務者が賃銀にて購入し、消費する食料と農業者自らが消費する食料との二単位の生産階級内にて消費せられる農産物を生産資本と解したのである。

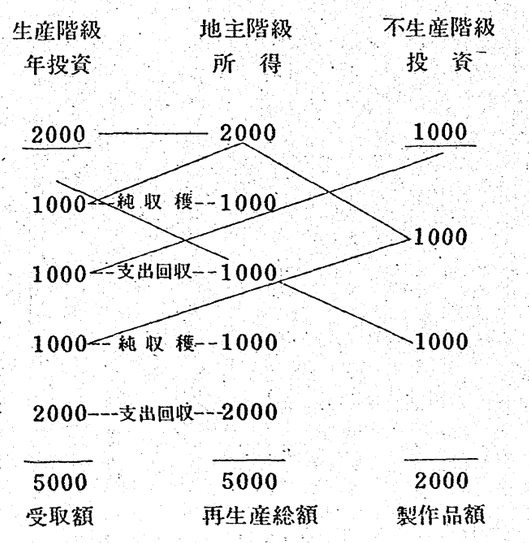
而してその消費せらるる農産物が範式に「年投資の支出」として表示されるものと解するのである。

㈢ 尚不生産階級の投資に就ては坂田教授は原表の解説にては、生産階級の年投資と同様に財貨即ち工業の製作品と解し而も、それが流通の当初商品として地主階級に購入され、斯くて不生産階級は貨幣の形でその手にとり戻すものと解したが、略表の附記に農産物再生産総額五千リーヴルとは別に計上された不生産階級の投資一千リーヴルは「貨幣形態のそれとでも考えるより他に仕方がない」（「訳者解説」六三頁）と考えられたのである。而して範式に到っては「不生産階級は、期間のはじめにおいて貨幣形態をとる投資以外なにものをも所有しない」（「訳者解説」七二頁）ものとし「一期間の末に不生産階級の手に残り、」翌年再び生産階級に対して使用されるその投資の回収分とし保存されるのは「財貨でなく、貨幣であることが明瞭である」（「訳者解説」七四頁）とせられたのである。

原表の解釈に於ても、不生産階級の投資を貨幣形態と解した筆者は生産階級に購入せられたる製作品の代金が本年度の不生産階級の投資として保有せらるるものとしたのであるが略表に於ても同じであり、その保存せられる投資が原料購入のために生産階級に支出される過程は原表の形式では「補足せられたる原表」（本稿第三図）に、略表の方式では「補足せられたる略表」（本稿第四図）に表示したのであるが、略式や範式ではそれが貨幣である地主階級の所得と同列の投資の位置に於て生産階級の年投資と均齊を保って支出されるものと解釈したのである（三田学会雑誌第三十八巻第八号五三頁第七図、本稿第七図、第八図参照）。

第八図

「補足せられたる範式」



㈣ 斯くして、坂田教授の解釈に拠れば地主階級の所得額としての貨幣二単位の外に、不生産階級の投資としての貨幣一単位を期初に於て前提とすることとなるが、坂田教授は「範式になってこの点に大きな変化」（「訳者解説」七六頁）があったものとせられる。尚教授は『農業哲学綱要』の説明から略式に於ては「原表以来貨幣量は収入、すなわち純生産物と等量とされてきた。略式においてもこの点は変っていない」（「訳者解説」七六頁）とせらるるが坂田教授の解釈では略式の機構にては当然範式のごとくその支出過程では貨幣量は三単位を要することとなるものと考えられる。

生産階級の純収穫即ち地主階級の所得と等量の貨幣額をもって一国の充分なる貨幣量となす重農主義経済学派の根本理論に一致する原表以来の構想が範式に至って大きく変化して貨幣量が三単位、三十億リーヴルを要することとなったことに就ては坂田教授も不満を感ぜられたもののごとく貨幣量を二十億リーヴルとすることに就ては、バウエルの解説に賛意を表せられるのである（「訳者解説」七七頁）。

地主階級の所得の外に、それと同列の生産階級の年投資も不生産階級の投資も貨幣と解するも筆者は略式や範式の所要貨幣量に就てはマルクスやバウエルと共に、二単位、二千又は二十億リーヴルに足るものとし、その循環の過程の中に於て地主階級の所得ともなり、生産・不生産両階級の投資ともなるものと解するのである。

㈤ 従って期初に於て坂田教授は

地主階級に、その所得としての貨幣二単位、二千又は二十億リーヴル

生産階級に、その年々再生産する農産物五単位、五千又は五十億リーヴル

不生産階級に、その投資として貨幣一単位、一千又は十億リーヴル

総額八単位、八千又は八十億リーヴルの富を前提とするが、筆者はマルクスと同様に略式にても範式にても

地主階級に、その所得としての貨幣二単位、二千又は二十億リーヴル

生産階級に、その年々再生産する農産物五単位、五千又は五十億リーヴル

不生産階級に、その年々他の二階級に売却する工業の製作品二単位、二千又は二十億リーヴル

総額九単位、九千又は九十億リーヴルの富を前提とすることによりて、その流通に不自然な形が表わることなくして解釈し得たのである（三田学会雑誌第三十八巻第八号五三頁第七図、本稿第七図参照、本稿にては第六図の「坂田教授の範式解説図」と比較し易くするために同じ形式を採用することとした。尚この解説に基づき原表のごとく中央に再生産さるる農産物を記入せる「補足せられたる範式」を第八図として掲げることとする）。

五

㈠ 経済表の原表や略表に在りては生産階級の投資の利子を別に考慮するものとしてその回収分を含まない農産物の再生産額四単位のみが表の対象となり、従って不生産階級の投資の支出過程は表式さ

れずして貨幣の一単位が不生産階級に止まり、生産階級に還流せずして、貨幣の循環が不完全であったが、『農業哲学綱要』の略式や、『経済表の分析』の範式に於て、初めて投資の利子の回収分を含めて農産物再生産額の五単位が表式の対象となり、生産・不生産両階級の貨幣としての投資の支出が、地主階級の所得と同列の位置から明確に均齊に表式されて、三階級間のすべての支出過程が表明され、従って貨幣の完全な循環が表現さるることとなったのである。この意味に於て筆者は範式（略式）をもって経済表の完成と考えるものであって、坂田教授のごとく範式を経済表（原表）の単なる一解説図と解することには同意し難いのである。ケネーみずからも、直ちにこの新たに創案せる範式を使用して彼等重農主義経済学派の提唱する二大政策「穀物自由輸出政策」と「土地純収益単一課税制度」とが祖国フランスの経済再建の効果を『（第一）経済問題』Problème Economique と『第二経済問題』Seconde problème Economique とに於て検討し、其の他凡百の経済問題の解決のために、辿らなければならぬ経済表の使用方法の一例としているのである（坂田訳『ケネー経済表』二一八―二八八頁参照）。而も、その後はケネーも、ミラボー侯も、もはや経済表に就て論ずることがなかったのである。

㈡ 然しながら、経済表の原表には原表としての意義があり、純収穫が商品資本として、他の二階級に売却せられて貨幣資本となり、その支出によりて購入せらるる生産資本の使用消費によりて再び純収穫が再生産せらるる過程や、階級間の相互的支出過程に於て生産階級の年投資の半額が不生産階級に支出せられ、又不生産階級の投資が補塡せらるる過程、又中央に再生産せらるる純収穫を表明し、その売却によりて得らるる純収益が地主階級の所得として納付せらるる過程とが表示されている点等、経済表の根本表として重視すべきものであり、その理解なくしては、略表も略式も範式も解明し得ないのである。又『農業哲学』の略表は原表のジグザグの支出過程を括約して、限られた紙面に、簡明に全国的の数字をそのまま使用し得る利点がある。『農業哲学綱要』の略式や『経済表の分析』の範式は三階級のすべての支出過程を、従って、貨幣の完全なる循環を表明し、且つ地主階級の所得の支出に就てのみならずして、生産・不生産両階級の投資の支出をも明確に、均齊に表式し、そこに記入せられる数字の如何によりて一国の経済状態を的確に判明し得るものとなったのである。

㈢ 経済表原表の生産階級と地主階級との第一段階の点線の過程に就て独自の解釈を試みられた坂田教授の解説は、この点線を欠く略表にはそのまま適用せられず、又その略表の解説は貨幣の流通量を三単位と解するその範式へは、そのまま適合せざることとなるのである。これは解説に於ても忠実なる訳者の態度をもって、用語の不正確は不正確なりに、「矛盾は矛盾なりに、又、曖昧は曖昧なりに」説かれた結果であるものと考えられる（「訳者序文」五頁参照）。

ケネー生誕二百五十年の昭和十九年に、筆者はケネーやミラボー侯の経済表に就ての諸解説の時間的変化と、その前後の矛盾とを検討し、前後相互に補足しつつ独断に陥ることを懼れながら、経済表の原表から、そのジグザグの支出過程を総括した略表を経て略式や範式へ到達せる推移を、点線にて示めされる機構の面と、それぞれに使用される数字の論拠からと一貫した解説を試み三田学会雑誌（第三十八巻第二号、三・四合併号、八号）に連載したのである。

筆者の試みた「補足せられたる原表」（三田学会雑誌第三十八巻第三・四合併号一一二頁第二図、同誌第八号三三頁第四図、本稿第三図）と「補足せられたる略表」（三田学会雑誌第三十八巻第三・四合併号三四頁第五図、本稿第四図）はいずれもただ原表から略表を経て略式や範式に到達せる経路を明らかにせんとして試みたものであって、原表も、略表も、又略式をも範式をもケネーが吾々に遺したままの形に於て統一ある解釈を試みたのである。尚経済表（原表）のごとく中央に再生産せらるる農産物額を記入せる「補足せられたる範式」を本稿第八図として掲載することとする。

それぞれに使用される数字と点線にて示めされる経済表の機構とを発展的に追究したのであるが、経済表のこの三種の図表はそれぞれの前提の下に於て、相互になんら矛盾することなく、又同時に存在し得るとの結論に到達したのである。

又、斯くケネーと共に経済表の原表から略表を経て、範式（略式）へと辿ることによりて、初めて難解の経済表も若干理解し易くなるであろう。

従来の研究は専ら、仏蘭西の農業再建後の社会の恒久不変の基本的支出秩序を表式する規範的の「均衡の経済表」を対象としたものであったが、次の機会に、ウーグ博士の「不均衡の経済表」の研究を中心に、当時の仏蘭西に於ける経済表の実践的性格の検討を試みることとする。

経済表がケネーみずからの手によりて印刷せられた一七五八年より本年は二百年目に当りその記念として、内外の経済学界に於て経済表に関するさらに貴重なる発見や、多くの研究が発表せられるものと期待されている。